

ヘリテージ・エコシステムに関する群馬宣言

2025年1月10日から11日にかけて、群馬県高崎市の群馬音楽センターにおいて、国際シンポジウム「絹の歴史と文化を未来に紡ぐ ヘリテージ・エコシステムに向けて：遺産、地域、持続的発展」^注が開催された。このシンポジウムは、群馬県が関係団体および日本イコモスと協力し、文化庁の惜しみない支援を受けて開催されたものである。

このシンポジウムは、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録10周年を記念して行われたものである。日本を含む19か国以上から約80名の遺産専門家が参加し、さらに群馬県内外から多くの聴衆が集まり、この遺産を一つの事例としながら、遺産保存における課題と可能性について議論を行った。

このシンポジウムは、また、「オーセンティシティに関する奈良文書」が1994年に日本で採択されてから30周年を祝うものでもあった。過去30年間にわたる遺産のオーセンティシティに関する理念とその実践を振り返りつつ、参加者は経験を共有し、互いに学び合った。

1. 背景

地域的な枠組みで見ると、このシンポジウムの必要は、「富岡製糸場と絹産業遺産群」が置かれる状況から生じたものである。この世界遺産は、日本における長年の伝統と技術の進歩を基盤とし、フランスの技術を取り入れることで製糸技術を進化させた技術革新の中心的存在である。20世紀初頭における世界の生糸市場での日本の重要な役割を示しており、生糸生産技術を早い時期に発展させ、世界に広めたことを証明するものとして、顕著な普遍的価値が認められている。

しかし、日本の絹産業は、蚕種製造、養蚕、製糸、染色、織布、仕立て、販売、流通など、多岐にわたる専門職能を持つ多くの人々やコミュニティの直接的・間接的な支えによって成り立ってきた。これらのつながりが、強固な絹のエコシステムを築き上げたのである。現在も、技術開発や商品開発を進めながら、民間の製糸業や織物業が小規模ながら営まれており、絹産業への新規参入者も現れている。

当該世界遺産の4つの構成資産は、1,200を超える関連資産の中から選ばれた。この選定プロセスは、これら4つの構成資産のみが重要な遺産であるという認識を生み出す結果となった。この状況への対処として、「かか

「あ天下一ぐんまの絹物語ー」の日本遺産認定、「ぐんま絹遺産」の登録、絹産業に関する知識を持つ何百人もの人々へのインタビュー、上毛かるたなど、公的・民間双方によるさまざまな取り組みが行われている。これらの取り組みは、絹産業の場や記憶を継承し、地域におけるその多面的な意義に光を当てている。

行政間の連携においては、これまで行われてきた群馬県と関係市町村による専門家会合や事務レベル会合に加え、地方自治体の首長が参加する「世界遺産トップ会議」が2023年に設置された。

かつては群馬県だけでなく日本各地に広がっていた絹産業が衰退する中、世界遺産の4つの構成資産を、関連する記憶や資源、活動と結びつけるための努力が進められている。こうしたつながりを通じて、人々やコミュニティの間に新たな関係を構築することが可能であり、またなされるべきである。ヘリテージ・エコシステムという概念は、このような必要から生まれた。

これを世界的な枠組みで捉え、このシンポジウムでは、ヘリテージ・エコシステムという包括的な概念に焦点を当てた。この概念は、文化遺産を構成する要素やその関連領域を結びつける重要性を強調している。これらの構成要素には、有形及び無形、文化的及び自然的な遺産の形態と共に、人間及び人間以外の生物その他の権利を有するものが含まれる。この概念はまた、これらの要素の間のつながりを強化することの重要性にも光を当てている。これらの要素が集まり、相互に作用することで網の目のように密接に絡み合う状態が形成され、その中で遺産が形作られ、多様な意義（文化的、社会的、環境的、経済的意義など）が生み出されている。

ヘリテージ・エコシステムというアプローチは、固有の価値を持って遺産を構成する資産の間の関係性を包括的に捉え、支えるための全体的な枠組みを提供する。この枠組みにより、ローカルからグローバルに至るまで、保存と管理における戦略や実践の向上が図られる。

このシンポジウムでは、4つのテーマに焦点が当てられ、一連の相互に関連する提言が生み出された。ヘリテージ・エコシステムの探求を進めるうえで検討されたテーマは以下の通りである：

- ヘリテージ・エコシステムのメカニズムとシステム
- ヘリテージ・コミュニティの形成と役割
- 近代建築と産業遺産の保存と管理
- 技術と遺産の未来

II. 前文

- (1) 21世紀における急速な変化と遺産を成す資源に対する多様な脅威を踏まえ、新たなアプローチを採用する必要性が認識されている。そのアプローチは、文化的、社会的、環境的、そして経済的な持続可能性を実現するために、文化遺産として受け継がれる資産の継続的な利用と管理を統合するとともに、遺産が広がる場を革新や新たな可能性に開くことに、積極的に寄与するものである。
- (2) この宣言の背景の根底には、国内法や規制、伝統的な遺産管理システムが含まれ、これには先住民族の長い歴史にわたる慣習も含まれる。特にこのシンポジウムでは、オーセンティシティ、顕著な普遍的価値（OUV）、有形および無形遺産の統合に関する過去30年間の批判的思考を基盤とした。この知識体系は、ICOMOS、世界遺産委員会、UNESCOによる活動を通じて発展してきたものであり、それには会議、規範的ツールの作成、および遺産専門家やコミュニティの地域的な集會が含まれる。
 - ・ 記念建造物及び遺跡の保存修復に関する国際憲章（ヴェニス憲章、1964年）
 - ・ 世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（世界遺産条約、1972年）およびその運用指針（2024年改訂版）
 - ・ オーセンティシティに関する奈良文書（1994年）
 - ・ 無形文化遺産の保護に関する条約（2003年）
 - ・ 奈良+10：有形文化遺産と無形文化遺産の保護に関する統合的アプローチについての大和宣言（2004年）
 - ・ 文化的表現の多様性の保護及び促進に関する条約（2005年）
 - ・ 先住民族の権利に関する国連宣言（2007年）
 - ・ 歴史的都市景観に関する勧告（2011年）
 - ・ 奈良+20：遺産の実践、文化的価値及びオーセンティシティの概念に関する議論（2014年）
 - ・ 第21回ICOMOS総会（シドニー）で採択された先住民族に関する3つの決議（21GA 2023/15,18,21）
 - ・ オウロ・プレート文書（2024年）
- (3) ヘリテージ・エコシステムは、遺産の多面的な機能と、伝統的なものから革新的なものまでの多様な要素が相互に補完し合い、持続可能性を保つための枠組みを提供する。これらの要素には、土地や社会全体にわたる遺産資産に対して人々が育んできた認識、知識、期待、アイデ

ンティティ、そして誇りが含まれる。ヘリテージ・エコシステムというアプローチの重要な目的の一つは、地域の人々が共有してきた遺産の価値とその中心的な役割についての理解を深めることである。これにより、地域と世界を結ぶことが可能となり、また、過去から受け継がれたもので、今日および未来の地域社会の活力を高め得るのである。

- (4) ヘリテージ・エコシステムというアプローチは、多面的な評価を可能にし、遺産の多様性や意義、価値の積層を支える。このアプローチは、持続可能な保存を実現するためのギャップを埋める助けとなり、経済、社会、環境という持続可能性の3つの柱を効果的に機能させることができる。
- (5) 世界遺産は、より広範かつ相互に関連する遺産の中から、世界的な視点で厳選された代表的なものである。一連のすべての資産を網羅しているわけではない。遺産を構成する他の資源とのつながりを認識し、再構築することが、遺産の継承を促進するうえで不可欠である。
- (6) ヘリテージ・エコシステムというアプローチは、地域的に意義のある遺産から世界的に認知されている遺産まで、過去から受け継がれたきた一連のものをヘリテージ・エコシステムに統合するという課題を理解し、対処するうえで有用である。したがって、遺産が個々のコミュニティのアイデンティティや活力をどのように形成するのかを理解することは、遺産が共有の利益を生み出す役割を果たす、活気ある環境を創出するうえで重要となる。
- (7) 我々は、遺産が作られた時代とは異なる文化的、社会的、環境的、経済的な現実の中に生きている。遺産は、過去についての情報を与え、現在にインスピレーションを与え、未来に適応する力を我々にもたらす。今後を見据えると、ヘリテージ・エコシステムというアプローチは、有形の遺産の特徴や特性を保存することと、無形の伝統や慣習を理解し、尊重することの両方を伴うオーセンティシティを育み、促進することを可能とする。変化は絶え間ないプロセスであり、ヘリテージ・エコシステムは、コミュニティが遺産の価値を高めるような方法で、文化的、社会的、環境的、経済的、教育的、技術的といった価値を付加しながら遺産を用い、適切に変容させる力を与えるものである。
- (8) オーセンティシティに関する奈良文書（1994年）は、社会的信念や価値観の違いの認識を促進するとともに、無形遺産への配慮を育んだ。遺産のオーセンティシティという概念は、有形と無形、自然と文化、地

域と世界、人間と人間以外の生命との統合が進む中で、ますます包括的な形で進化し続けている。

- (9) 今日、遺産は分断される傾向を見せ、その持続可能性を未来にわたって確保するためには、場所、人々、そして価値のより良い結びつきが求められている。ヘリテージ・エコシステムは、この目標を達成するために分野横断的かつ統合的なアプローチを促進するものである。
- (10) 遺産が広がる多くの場が直面する共通課題は、現代のコミュニティが、コミュニティと遺産資源の双方の持続可能性を高める方法により、文化的、社会的、環境的、経済的、教育的、芸術的な資産である土地とどのように関わり、恩恵を受けることができるかを見いだそうとしている点にある。人々に大切に思われている遺産は、観光の利益をもたらすだけでなく、コミュニティにとってのアイデンティティやインスピレーション、意味の源泉として、重要な存在であり続ける。

III. 勧告

あらゆる種類の遺産の持続可能性を確保するためには、まだやらなければならないことが多く残されている。脅威は広範で緊急の課題となっている一方で、可能性を秘めた機会も存在している。遺産が広がるそれぞれの場に適したヘリテージ・エコシステムを開発し、更新するためのさらなる取り組みの輪を広げていくことを呼びかけるために、2025年1月10日から11日にかけて群馬県高崎市に集った我々参加者は、以下の提言を今後の取り組みの指針として提示する。

このシンポジウムでは、以下の「ヘリテージ・エコシステムに関する群馬宣言」を採択する。この宣言は、過去から現在、そして未来の世代へと遺産を保存し、再生し、継承するために、ヘリテージ・エコシステムというアプローチを取り入れた提言を行っている。提言は、地域から国際までのあらゆるレベルのコミュニティや行政機関、遺産専門家、遺産関連機関、さらには国際機関、特に ICOMOS およびそのパートナーである IUCN、ICCROM に向けられたものである。

1. 多様な価値観と声を持つコミュニティの関与と活力の強化

コミュニティ、遺産を成す資産、そして価値は密接に結びついている。人々は地域の基礎自治体および広域自治体と連携しながら、場を定め、投資し、管理し、時間をかけてその暮らしを形作っていく。地域の知識、伝統技能、そして文化的な繋がりは遺産の場に足跡を刻み、それを支え続け

る重要な役割を果たしている。ヘリテージ・エコシステムを守り、持続させるためには、コミュニティや権利者の全面的な関与が不可欠である。

したがって、我々は、以下を提言する：

- (1) 関係するコミュニティを巻き込みながら、ヘリテージ・エコシステムの構造と機能を探求すること。この構造と機能には、文化遺産を構成する資産、それらの間のつながり、そして遺産の価値が含まれる。
- (2) コミュニティが十分な関与を通して多様な価値を認識できるように権限を付与すること。その際、多様な視点が文化遺産の理解、保護、管理、および関連する伝統や知識に確実に反映されること。
- (3) 人間と地球の権利に調和させながら遺産を継承する中で、地域や先住民の伝統や慣習の理解と継続を支援すること。
- (4) 将来の世代やコミュニティの必要や願望を考慮しながら、現代の必要や願望をヘリテージ・エコシステムに取り入れること。
- (5) 遺産が広がる場の直接的な環境を超えたコミュニティの広範な影響と関与を認識すること。これには、文化的、社会的、環境的、経済的、歴史的な繋がりを通じて遺産の価値に貢献する、またはその影響を受ける遠隔地のコミュニティが含まれる。
- (6) 透明性が高く、開かれた、包摂的で適切な管理運営の仕組みや体制が構築されるように支援すること。

2. 分野横断的取り組みとしてのヘリテージ・エコシステム

ヘリテージ・エコシステムは、ローカルからグローバルまで、遺産が広がる多様な場、慣習、人々を表現するものである。それは、遺産の価値の持続と変化、そしてそれらを未来へと継承するための継続的かつ責任ある管理と継承に取り組むものであり、過去から受け継がれた資産が相互に関連し合う群として機能する。

ヘリテージ・エコシステムというアプローチは、様々な種類、重要性、そしてオーセンティシティを持つ価値ある遺産を統合し、相互に支えるための枠組みを提供する。このアプローチは、遺産の多様な要素を総体的に捉える視点を働かせるものである。

ヘリテージ・エコシステムの次元には、記念、感情、生産、創造、革新を表わす先人の取り組みが含まれる場合がある。これらの要素は、都市や町、田園、海景、景観、道、あるいは地域クラスターの中に見出すことができる。

したがって、我々は、以下を提言する：

- (1) ヘリテージ・エコシステムの発展、管理、継承に関する分野横断的な議論を促進するための様々なプラットフォームを設立すること。
- (2) ヘリテージ・エコシステムを管理する中で、先住民族を含めた伝統や慣習、人間以外の権利者を尊重しながら、有形遺産と無形遺産を結びつけること。
- (3) 文化遺産と自然遺産、さらには人間以外の権利者との間に存在する現在の分断を克服すること。
- (4) ヘリテージ・エコシステムという見方を通じて、オーセンティシティを探求すること。
- (5) 意見が対立する遺産について合意形成と紛争解決の手段を発展させること。
- (6) 地域や国家の境界を超えたヘリテージ・エコシステムのネットワークを追求すること。また、共通或いは類似する遺産の研究、調査、保護のための国際的な協力関係を構築すること。
- (7) 分野横断的な理解におけるその重要性を認識しながら、代々受け継がれてきた、あるいは失われた伝統的な知識体系を研究し、尊重すること。

3. 脅威への対応と機会の活用

遺産に対する脅威は多様かつ広範囲に及び、人口移動、経済的圧力、過剰または不適切な利用、無規制の観光、侵害といった要因による遺産資源の徐々な劣化には特に注意を要する。また、気候変動や生物多様性の喪失、汚染といった世界的な危機も全て、文化遺産や自然遺産の浸食をもたらしている。同時に、気候変動、生物多様性の喪失、汚染、社会不安といった課題に対応する中では、レジリエンスや現代的な機能に適応できるよう、遺産を変化させる機会も存在する。

したがって、我々は、以下のことを提言する：

- (1) ヘリテージ・エコシステムに関する環境的、社会的、経済的なリスクと機会を特定し、その起こりうる影響を予測すること。このプロセスでは、関係するコミュニティの参加を確実にする必要がある。
- (2) ヘリテージ・エコシステムにおける変化や変容のプロセスを理解し、管理すること。その際、遺産の価値と資産のオーセンティシティを尊重する必要がある。
- (3) 何世代にもわたって遺産を支えてきた先住民族の伝統や慣習を記録し、尊重すること。また、脅威に対処するために伝統的な知識を適応する

機会を模索すること。

- (4) 急速な変化や多様な脅威に対応するためのレジリエンスに向けた好例を共有すること。
- (5) 特定のリスクに対応するため、または新たな条件を受け入れるため、ヘリテージ・エコシステムというアプローチに従いながら、遺産が広がる場の現代的な活用を拡大する機会を探求し、発展させること。
- (6) 今日における遺産の意義を高め、未来へと継承するための事例を模索し、共有すること。

4. ヘリテージ・エコシステムの持続のための新たな技術

テクノロジーは飛躍的に進化し、先端的な分析装置による新発見、保存方法の確立、伝統産業の継承や技術習得の支援等、文化遺産保存の分野に革新をもたらしている。中でも、この10年間で、デジタル技術は特に大きな発展を遂げてきた。

人工知能（AI）、クロス・リアリティ（XR）、デジタルツイン技術やその他の応用技術の出現は、文化遺産の解説や活用、そして交流の可能性を豊かに広げている。一方で、現実世界と仮想世界が共存する現代においては、これらの境界を曖昧とするリスクも存在している。

技術的革新の極めて大きな可能性がある中、遺産の保全と継承を強化するために、これらのツールを積極的に使いこなしていくことが不可欠である。このような取り組みは、ヘリテージ・エコシステムの持続可能性を確保することに資するであろう。

それゆえ、我々は、新しい技術を以下の目的を達成するためのツールとして探求し、試行することを提言する：

- (1) 個々の遺産を保護し、その遺産のオーセンティシティを確保するとともに、ヘリテージ・エコシステムの強化を図ること。
- (2) 遺産の価値を精緻かつ正確に解釈し、遺産に対するより深く多様な理解を促進すること。
- (3) 遺産を基盤とした多様な交流の形にひらめきを与え、それを発展させること。

IV. 結語

結びとして、我々は、多様な有形および無形の資産や、遺産の創出および継承のプロセスを統合することを考慮し、さらにヘリテージ・エコシステムというアプローチを採用することで、遺産管理を進展させ、オーセン

ティシティの概念を豊かにできることを確認した。ヘリテージ・エコシステムという考え方は、遺産をその社会的、自然的、文化的環境と結びつけるものである。この考え方は、地球の未来を築くために遺産を統合する基盤を形成するものである。

学術委員会および参加者は、このシンポジウムを豊かな意見交換の場とした主催者の皆様、特に群馬県、日本イコモス、そして日本国文化庁にはその助成に対し、深く感謝申し上げる。

2025年1月11日、日本国群馬県高崎市で開催された国際シンポジウム「絹の歴史と文化を未来に紡ぐ ヘリテージ・エコシステムに向けて：遺産、地域、持続可能な発展」において、本宣言を採択した。

[注] シンポジウムの英語タイトルは、“Further Evolution of Authenticity through the Lens of Heritage Ecosystems: Heritage, Communities, and Sustainable Development”である。直訳だと「ヘリテージ・エコシステムの視点から探求するオーセンティシティのさらなる進化：遺産、地域、持続的発展」となるが、群馬県を開催地とし、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」を事例とするにあたり、国内の方々がその趣旨を理解しやすいよう、「絹の歴史と文化を未来に紡ぐ ヘリテージ・エコシステムに向けて：遺産、地域、持続的発展」とした。